

## 産後の諸障害に乳汁分泌不全を併発した授乳婦に対する漢方医学的治療介入

— 特に、頑固な脾虚(機能性胃腸症)、冷え症の合併例をとおして —

清水医院(佐賀県) 院長 清水 正彦

### キーワード

- 乳汁分泌不全
- 脾虚
- 冷え(裏寒)
- 当帰芍薬散料

貧血、全身倦怠感、むくみ、冷えなどを訴える授乳婦には乳汁分泌不全傾向が多く見られる。今回、頑固な脾虚と冷え症の合併例に漢方医学的治療介入を試み、著効した例を経験した。脾の建て直しをまず念頭におきながら治療することが重要と考えられる。

### はじめに

産褥婦にしばしば見られる主な障害として、貧血、全身倦怠感、むくみ、冷えなどが挙げられるが、東洋医学的には当帰芍薬散料の証であるとされている。これらの症状を呈する授乳婦には乳汁分泌不全傾向が多く見られ、乳房マッサージや消炎酵素薬で対応されることが多いが、満足な効果は得られにくい。

今回、産後の諸障害に乳汁分泌不全を併発した授乳婦に対し、随証治療に基づいた漢方医学的介入を試み、著効した例を経験したので、考察を加えて報告する。

### 症例

#### 25歳、主婦、1妊1産

主訴：乳汁分泌不全、乳房緊満感、手足腰の冷え、下肢のむくみ感、便秘、食欲低下

既往歴：8歳の時に肺炎。切迫流産、切迫早産で入院の既往あり。

現病歴：平成19年10月、妊娠39週2日で2860gの男児を正常分娩。乳汁分泌不足と乳房緊満感が強い。授乳の度に疲労感を自覚し、手足腰の冷え、下肢のむくみ感、便秘、食欲低下が強い。産後に膈下垂を指摘されたとのこと。産後7日目の退院直後に当院初診。

#### 【初診時現症と検査所見】

身長158cm、体重47kg、血圧100/70mmHg。

一般検血：Hb 11.4g/dL、肝腎機能：異常なし。

眼瞼結膜：貧血なし。

両乳房：緊満、やや熱感あり。乳房基底部の支持組織に弾性硬の抵抗、圧痛。乳汁白濁。鬱滯性乳汁分泌不全の状態。

漢方的所見：皮膚は全体に色白で、やや乾燥ぎみ。脈はやや沈。舌は薄白苔。歯圧痕(+)、舌背静脈怒張(+)、舌尖部やや紅。腹部は軟でやや冷たく、心窩部振水音(+)、右下腹部瘀血圧痛(±)。これらの所見から、陰証、虚証、血虚、脾虚、冷え(裏寒)、水毒、瘀血と判断した。

### 【臨床経過】

#### ●産後7日目

消化管への負荷を避ける目的で、和食中心の食生活を指導した。陰証、虚証、血虚、脾虚、裏寒、水毒、瘀血の病態を踏まえ、手足腰の冷えとむくみ感に対して当帰芍薬散料6gと食欲低下に対して六君子湯6gを投与。退院後に少し動きすぎたためか、悪露が幾分増えたとの訴えがあり、用心のため当帰芍薬散料を一時中止。六君子湯のみで経過を見たところ食欲低下は改善。乳汁分泌、手足腰の冷え、下肢のむくみ感は50%改善。

#### ●産後1ヵ月半

悪露はない。憂鬱感が出現。便秘が強い。舌は湿潤してやや白苔があり、舌尖部は紅。下腹部は軟らかくて冷たい。眼瞼結膜はやや貧血状。脈は沈。裏寒、脾虚と血虚、気鬱・気滯と考え、当帰芍薬散料6gと大建中湯9gに変更。憂鬱感と便秘改善。乳汁分泌50%改善。以後随証的に処方を再編しながら治療。

産後の諸障害や乳汁分泌状態も良好になってきたため、廃薬を考えていたところに来院。

#### ●産後約5ヵ月

かぜをひいて以来、便秘、手足腰の冷え、足のむくみ感、乳汁分泌状態が悪化。全身倦怠感出現。眼瞼結膜は貧血状。脈は沈、舌は湿潤、舌背静脈怒張(+)、舌尖部やや紅。腹部は冷たく、心窩部振水音(+)、心下痞鞭(+)、右下腹部瘀血圧痛(±)から、陰証、虚証で裏寒、脾虚、水毒、瘀血、血虚と考え、当帰芍薬散料6gと人參湯4gを投与。

#### ●産後6ヵ月半

乳汁分泌、便秘は改善し、全身倦怠感や手足腰の冷えも気にならなくなった。

#### ●産後7ヵ月

頭痛、腰痛、胃もたれ感、倦怠感が出現。便秘、手足とくに足と腰の冷えが強くなった。乳汁分泌が減ってきた。脈はやや浮弱。舌は湿潤、舌背静脈怒張(+)、舌尖部やや紅。腹部は冷たく、心窩部振水音(+)、心下痞鞭(+)、右下腹部瘀血圧痛(+)。陰証、虚証で裏寒、脾虚、

水毒、瘀血、血虚に表証を伴った状態と考え、当帰芍薬散料 6g と桂枝人参湯 4g を投与。徐々に諸症状が改善したので当帰芍薬散料を 4g に減量。経過は良好で、さらに減量、廃薬を考慮した矢先に来院。

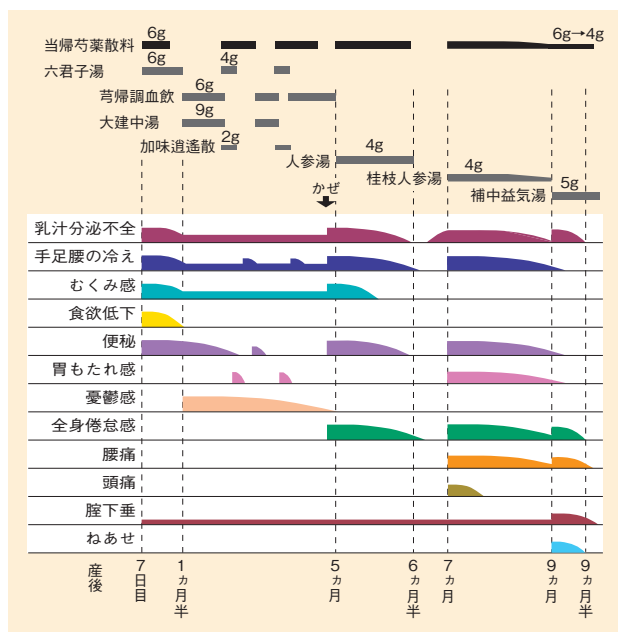
### ●産後約9ヵ月

全身倦怠感、腰痛、ねあせ、乳汁分泌不良が出現。膈下垂の症状が悪化してきた。脈はやや浮弱。舌は湿潤、舌背静脈怒張(±)、舌尖部やや紅。腹部は軟らかく、右下腹部瘀血圧痛(±)。右胸脇苦満(±)。陰証、虚証で裏寒、脾虚、水毒、瘀血、血虚、気鬱、気虚、中気下陷と考え、柴胡、升麻の升提作用に期待して、補中益気湯 5g に当帰芍薬散料 4g を併用し経過観察。

### ●産後約9ヵ月半

膈の下垂感、腰痛はまだあるも、他の諸症状は落ち着いている。現在、前同処方経過観察中である。

## 図 症例の経過



## 考察

通常、妊婦は増大する子宮により下部上部消化管が機械的に圧迫され、機能的胃腸症を来しやすい。分娩後、消化管の圧迫が解除されても、マタニティーブルーに代表されるような、東洋医学的には瘀血や血虚に伴う肝鬱、気鬱・気滯、気逆などの気の異常が起こりやすい状況下に置かれる。また、脾気虚、裏寒、痰飲を引き起こしやすい欧米化した食生活が、この気の異常に拍車をかけ、冷え、瘀血を慢性化させ、妊娠中に起こった機能的胃腸症の回復を妨げる大きな要因になり得ると考えられる。

本症例の初診時は、陰証で虚証の血虚、瘀血、水毒、脾虚、裏寒に対して当帰芍薬散料を、脾虚に対して六君子湯を選択した。

当帰芍薬散料は、産前産後の諸病に対する代表的方剤で、当帰(補血)、芍薬(補血収陰)、川芎(活血理気)、茯

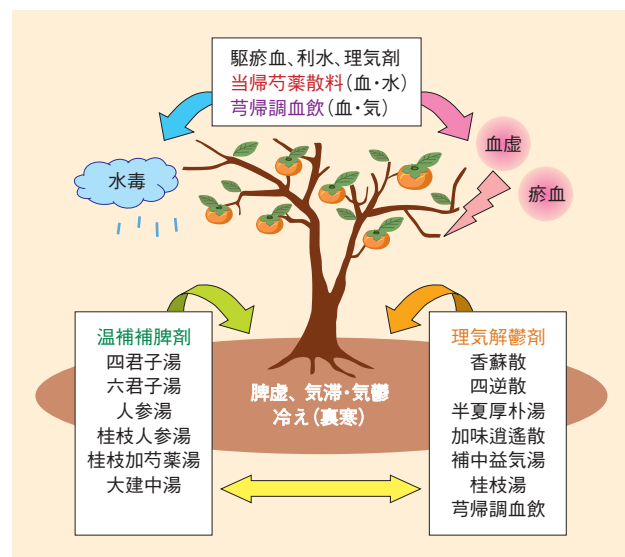
苓(利水)、沢瀉(利水)、白朮(補脾健脾、利湿)のコンビネーションにより、血と水の偏在による諸病をコントロールすることは周知の事実である。しかし一部には、芍薬の子宮収縮抑制作用を懸念する声もあり、その安全策としては、子宮収縮作用があり産後の神経症や体力低下に頻用される芎帰調血飲と当帰芍薬散料を兼用するか、1ヵ月検診時までは芎帰調血飲をメインに使う方法も一案といえよう。しかし、著者の経験では産後の血と水の偏在による諸病のファーストチョイスは当帰芍薬散料と考えている。

本症例は、産後1ヵ月半以降には、授乳に伴うストレスや裏(消化管)の冷え、瘀血からくる機能的胃腸症の介在がうかがわれ、産後5ヵ月目にかぜをひいて以来の状態も裏寒、脾虚(機能的胃腸症)から波及したもので、当帰芍薬散料、人參湯の証であった。

産後7ヵ月目には前証に加え、表証を伴った状態であったため浮弱の脈診をポイントとして人參湯を桂枝人参湯へ変更した。産後9ヵ月目には中気下陷、固摂作用低下を合併した状態で、補中益気湯が選択された。

機能的胃腸症、冷え症などの産後の諸障害に乳汁分泌不全を併発した授乳婦の東洋医学的病態の根底には、脾虚、裏寒、気滯・気鬱が横たわっており、その上に血虚、瘀血、水毒が複雑にからみあっていると考えられる。食事生活指導の下に温補補脾、次に理気解鬱を行った上で、血と水の異常の是正を図ることがポイントといえるのではなかろうか。

## 図 頑固な脾虚(機能的胃腸症)、冷え症などの産後の諸障害に乳汁分泌不全を併発した授乳婦への漢方治療



## まとめ

頑固な脾虚(機能的胃腸症)が少なからず根底にあり、産後の諸障害や乳汁分泌不全を併せ持った授乳婦への漢方医学的介入への一考察として、脾の建て直しをまず念頭に置きながら治療することが重要と考えられる。